碑　　前　　祭

―　色カードによる反応をもとにした話し合い　―

(1)　主題名　充実した生き方　〔１－（５)〕　　関連項目〔１－（２)〕
(2)　ねらい　新たな自分のよさを自覚し，充実した生き方を追求していこうとする態度を養う。
(3)　資料名　「碑前祭」
(4)　授業の展開例

	学　習　活　動	主な発問と生徒の心の動き	留　　意　　点
導入	１　クラブに関するクイズに答える。	○どのクラブのことか，考えてみよう。 ○演劇部には，どんな人が向いているだろうか。 ・表現力の豊かな人 ・明るくてひょうきんな人	○あらかじめ，各クラブにはどんな人がいるか，アンケートをとっておき，クイズ形式でクラブ名を考えさせる。 ○雰囲気を和らげ，リラックスさせる。
展開	２　資料前半を読み，「私」の性格を考える。 ３　「私」の気持ちを考える。 ４　資料後半を読み，「私」の気持ちを考える。	○「私」が話しかけられても答えられないのはなぜか。 ・相手がどう思うのか気になる ・考えているうちに時間が過ぎる ○なぜ演劇部に入ったのか。 ・由美に誘われて ・劇をしなくてもよいと思ったから ○この後，「私」はどうするか。 ・やめる　自分に向いていないから ・続ける　由美に悪いから ○演劇部を辞めなかったのはどんな気持ちからか。 ・朗読がどうなるか興味があった ・母に励まされて ◎碑前祭を終えた「私」の気持ちを考える。 ・演劇部に入ってよかった ・朗読できて感動した ・１年生から入っておけばよかった	○こういう性格の人に対して，否定的な雰囲気にならないように，その人の立場になって考えられるようにアドバイスする。 ○「やめる」「やめない」を色カードで意思表示させ，同じ色同士，違う色同士で意見交換をさせる。 ○考えが深まるように，吹き出しを利用する。
終末	５　自分のよいところを考える。 ６　教師の話を聞く。	○班の人のよいところをカードに書く。 ○自分で自覚しているよい点を加える。 ○丸がつかなかったものは，自覚していない「自分のよさ」であり，他にもよさがあるかもしれない。	○他の人に書いてもらった中で自覚しているものに○をつける。 ○やってみることで，新しい自分，可能性が引き出されることに気づかせる。

「碑　前　祭」

【前半】

私は小さい頃から人と話すのが苦手だった。友達と遊ぶことはあっても、限られた人だけだったし、自分から人を誘うこともなかった。本を読むことが好きで、学校から帰ると、外に出ることは少なかった。休憩時間も図書室に行くか、教室で本を読んで過ごしていた。

家族や親戚の人とはふつうに話せるのに、外へ出るとうまく話せない。自然と声も小さくなる。クラスの人から話しかけられることはあったが、どうしてもうまく話せない。話しかけられても答えないと、次第に声をかけられなくなる。

中二の終わり、私の所属していた図書部は来年からなくなることが決まった。今の三年生が引退したら、二年生が三名。一年生もいないためだ。私の学校では全員どこかの部に所属することになっている。どうしようかと困っていると、友達の由美から演劇部に誘われた。

「演劇なんてとんでもない。できないわよ。」

「大丈夫よ。演劇部といっても、みんながステージに立つわけじゃないんだから。大道具とか小道具、それに照明係でもいいのよ。私、副部長だから、礼子がその係になるようにしてあげる。それに活動するのもあと半年じゃない。」

あまり気は進まなかったが、少ない友人であり、いつも助けてもらっている由美にそこまで言われて断るのは悪いと思ったので、入ることに決めた。衣装を縫ったり、道具を作ることならできそうだ。

春休み、練習に行ってみて私は驚いた。全員が発声練習やダンスの練習をしている。基礎体力をつけるため、ランニングなどのトレーニングもある。

「ゆっくり走ればいいし、発声もみんなでするんだから大丈夫よ」

由美の励ましもあって、数日、何とかみんなについて練習をした。そんなある日、部長の川口さんからこんなことを言われた。

「山本さん、これから入学式で発表する劇の練習に入るけど、あなたは出ないから、碑前祭で発表する詩を考えてよ」

「碑前祭・・・？」

「演劇部はね、夏休みにある原爆の子の像碑前祭に毎年参加しているの。そこで、全員で詩を朗読するの。朗読する詩は今まで先輩たちが考えてきたのよ。」

由美が教えてくれたので、何をするかはわかった。

「私が詩を書くの？」

「あなたはまだ入ったばかりで、劇はできそうにないから、詩の担当になって。自分で考えてもいいし、図書室にある本から選んでもいい。山本さんはよく図書室に行っているでしょ。新学期から練習を始めるから、春休み中に考えてきてね。」

川口さんはそう言うと、劇の練習に入ってしまった。私は仕方なく、図書室に行って平和に関する詩を探した。練習の休憩中に由美が図書室に来てくれた。

「去年は担当した先輩が詩を考えたのよ。家にあるから明日見せてあげる。朗読は全員でするから、礼子も参加しなくちゃね。口さえ開けていれば、少々声を出さなくてもわからないから平気よ。」

私が詩を作るなんて・・・。でも、劇の練習をするよりはいい。そう考えて、詩をたくさ

ん読んだ。母にも協力してもらって考えた。

待っていても　平和は　来ない
私たちの願いで　そして　私たちの行動で　平和は生まれる
はじめの一歩を　踏みだそう
一人の力は小さくても
国を越え　世代を越え
手と手をつなぎ　心をつなぎ　平和の輪が広がる
その日を信じ　私たちは　熱い心で　一歩ずつ　進んでいこう

私が気に入った一節だ。川口さんに見せると、
「いいんじゃない。これをもとにして、練習を始めるから、先生に頼んで印刷してもらっておいて。それから、全員で読むところと、二～三人で読むところも考えておいてね。」
由美にも協力してもらって、台本ができた。

いつもの基礎練習の後で、詩の朗読をする。一年生も入部し、一緒に活動をしている。一年生はまだあまり声が出ないので、上級生から注意されることも多い。特に部長・副部長は「最初が肝心」とばかりに、「一年生、それで声を出しているつもりなの。次は一人ずつやって。」と厳しい口調で指導している。私も発声練習は苦手なので、一年生の気持ちはよくわかる。みんなの目が自分に向かないことを祈りながら、いつも早く時間が過ぎないかなあと思っていた。

練習の後、部室の裏で一年生がかたまって話している声が偶然聞こえてきた。
「あんなに厳しく言わなくてもいいのに。先輩の中にも声の小さい人もいるよ。山本先輩なんか、ほとんど声が出てないのに。」
「副部長と仲良しだから、何も言われないんじゃない？」
「えっー。そんなのずるいよ。ひいきしてるよね。」
私の声が小さいばっかりに、由美が悪者になっている。いつも助けてくれている由美に迷惑をかけている。やっぱり、ろくに声も出せない自分に演劇部は向いていない。入るんじゃなかった。やめようか・・・。

【後半】

家で母親に相談をした。母はこう言った。

「やめるのはいつでもやめられるけど、今やめたら本当に由美さんがひいきしていたことになってしまうでしょ。礼子は家ではふつうの声で話せるんだから、いざとなったら声は出るものよ。今までの自分じゃなくて、ありのままの自分を出せるいいチャンスだと思うな。思い切ってやってごらんよ。それでうまくいかなかったらやめてもいいよ。」

やめてもいいと言われ、少し気分も楽になった。由美や演劇部には迷惑がかからないようにしたい。とりあえず、声だけは出してみよう。

待っていても　平和は　来ない
私たちの願いで　そして　私たちの行動で　平和は生まれる
はじめの一歩を　踏みだそう

家で何度も練習をした。朝、学校に行くとき由美にどうしたら大きな声が出せるか聞いてみた。由美は驚いた様子だったが、こう教えてくれた。

「少し足を開いて、おなかに力を入れること。口はしっかり開けた方がいいよ。顔が下を向くとよくないから、体育館では正面の二階席に向かって声を出したらいい。初めは恥ずかしいかもしれないけど，慣れればなんてことないよ。」

その日、みんなと一緒に少し声を出した。ドキドキしたけど、時間が経つと気持ちも落ち着き、すっきりした気分になった。由美の言ったとおりにしたら、だんだんと大きな声も出るようになった。

「山本さん、声がよく通るようになったね。」

何日か続けたとき、川口さんからそう言われ、うれしかった。みんなも温かい目で自分を見てくれているような気がした。後輩も自分のことを先輩として接してくれるようになった。私は、周りを気にせず、気楽に過ごせるようになった。

夏休みに入り、碑前祭の日が来た。朝、七時に集合し、発声練習、リハーサルを行い、本番を迎えた。

手と手をつなぎ　心をつなぎ　平和の輪が広がる
その日を信じ　私たちは　熱い心で　一歩ずつ　進んでいこう

みんなの声が一つになって、朗読は終わった。聞いていた人から、大きな拍手が起こった。自分の体が熱くなる感じがした。由美のほおも紅潮している。碑前祭が終わって、みんなで抱き合って喜んだ。何とも言えない満足感とすがすがしさ。一回しかこの経験ができなかったことが残念だった。

二学期になり、いろいろな行事に、今までよりも積極的に参加できた。「山本さんて、結構楽しいね」と言われるようになった。自分を表現しなかったために、違う自分のままを人は認識していたのだ。演劇祭も無事終わり、中学校生活もあと少しとなり、進路を決定する時が来ている。今までは漠然と普通科高校に進学したいとしか考えていなかった。でも、今は、アナウンサーの仕事に興味をもっている。高校に進学したら、いろいろな体験もし、別の新たな自分を発見したいと思っている。

活用に生かすための実践報告

◎　「碑前祭」

１　主題の設定

これまでの自分や現在の自分，そして将来こうありたいという自分を静かに見つめ直すことは，自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。中学生の時期は自己理解が深まり，自分なりの生き方についての関心が高まってくる。一方で，自分の姿を自らの基準に照らして考えたり，他人との比較においてとらえたりするために，その至らなさに一人思い悩むことも少なくない。そして，他人と同じように扱われることを嫌ったり，反対に他人と異なることへの不安から個性を伸ばそうとすることに消極的になりがちである。

進路選択を迎える時期を前にして，自分の個性や適性を理解することが必要である。そのためには，いろいろな活動に積極的に取り組むことが必要であるが，中学生になると自分で自分の型にとらわれ，挑戦しようとしない場合が多い。

第２学年の後半，クラスにも慣れ，お互いのよさに気付き始めた頃に扱うのが効果的である。第３学年に向けて，いろいろな活動に取り組み，今までにない自分の力を発揮することで，正しい自己理解につながることを理解させたい。

２　指導過程の工夫

導入ではリラックスさせると共に，クラブごとに対し，どんなイメージをもっているか考えさせた。

生徒に自分のこととして考えさせるため，資料を二つに分け，礼子が演劇部をやめるのか続けるのか考えさせた。

また，続けるかやめるのか色カードで意思表示させることで，どちらかの選択を必ずすることになり，教師も一度にどちらを選んだか，把握できる。同じ色，違う色同士で話し合うことで選んだ理由の違いなどを知ることにもなる。

３　発問の工夫

やってよかったという達成感を感じさせるため，碑前祭の後の礼子の気持ちを考えさせた。書きやすいように吹き出しを利用するとよい。

話しかけられてもなかなか答えられないのはなぜか考えさせたが，学級内にそういう生徒がいる場合があるので，配慮した発問にするよう注意が必要である。

４　生徒の反応（授業後の感想）

身近な話題であり，生徒が自分自身のこととして考えやすい資料であった。

短気なところを直したい，最後までやり遂げられる人になりたいなど，生徒なりに自分の課題を感じているようであった。

場面設定を理解していない生徒がいたので，あらかじめ登場人物の紹介をしておくとよかったと思う。

５　実践者からの一言

やったことがないことに挑戦してみて，意外に楽しかったと感じている生徒は多いのではないかと思う。「照れ」や「自信のなさ」などから，周囲の反応を気にする時期ではあるが，「やってみる」ことの大切さを感じられるような授業にしたいと願い，資料を作成した。

（祇園中学校　澤井美由貴）